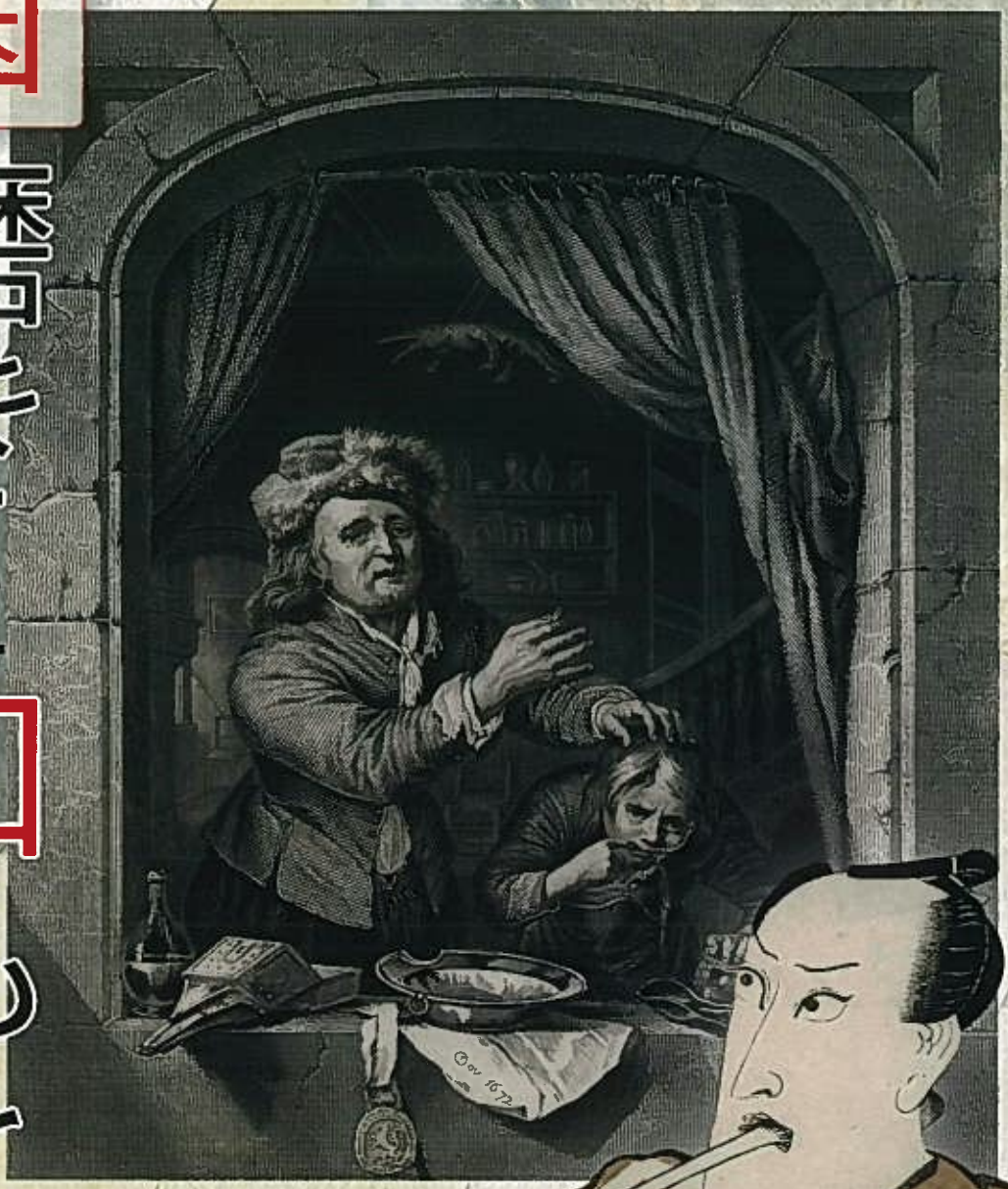
医の博物館　開館30周年記念

浮世絵と西洋版画にみる 歯磨きと口もと



無料入場

2018.9.11 火～9.17 月・祝

【開室時間】10：00～16：00　【会場】新潟市中央区浜浦町1丁目8番地

日本歯科大学 新潟生命歯学部 医の博物館 特設会場

【会期中の休館は無し】会期中は医の博物館も開館しています　【協力】一般社団法人神奈川県歯科医師会「歯の博物館」

【日本歯科大学新潟生命歯学部サイト】http://www.ngt.ndu.ac.jp/【お問い合わせ】025-267-1500

歌川国貞《俳優日時計　辰刻》大野粛英 蔵

歌川国芳《饗論草をしへ早引・歯》大野粛英 蔵

オノレ・ド・ミエ《なんて頑固な歯だ》羽坂勇司 蔵

浮世絵は、江戸時代のはじめ、墨一色の墨摺絵から始まり、丹絵、紅絵へと変遷し多色摺木版画様式による錦絵へと完成されていきました。浮世絵の「浮世」とは元来、当世風という意味でしたが、歌舞伎や遊里を指す意味を持つようになり、社会を絵画化した風俗画が浮世絵と呼ばれるようになりました。そのため題材としては、美人絵、歌舞伎の人気役者を描いた役者絵が多くあります。また小楊枝や房楊枝、お歯黒など生活の一部が描かれるものもあり、江戸時代の生活を知ることができる資料にもなります。鈴木春信、歌川豊国、歌川国貞、菊川英泉、豊原国周、歌川国芳、月岡芳年、落合芳幾など代表的な作品により、歯と関わる浮世絵を通覧していただきます。

西洋では 16 世紀になって木版画や銅版画（エッチング）の技法が発明され、19 世紀になると石版画（リトグラフ）が考案され、それとともに諷刺画が流行するようになり、更に新聞雑誌などマスコミが社会に滲透すると共に、これらのメディアを通じて 20 世紀初頭まで抜歯などを諷刺した絵画が流行しました。歯科医師といえるものは 18 世紀ごろからヨーロッパに現れますが、当時パリでさえその数は数人から数十人に過ぎなかったと言われ、「歯抜き人」なる人が大道で香具師まがいの口上を述べ、人を集めて歯を抜くことを業としていました。麻酔や消毒法の殆ど無い時代における民間人の抜歯を描いた、16 世紀から 20 世紀にわたる版画など代表的画家達の優れた作品をご覧いただけます。

本展は、「医の博物館」の設立 30 周年を記念して、歯にまつわる浮世絵の名品と西洋の版画を一般社団法人神奈川県歯科医師会が運営する「歯の博物館」の協力を得て一堂に集めるものです。

会場は 2 階で、エレベーター等の昇降設備がございませんので、ご注意下さい。

協力

歯の博物館（※要予約）
横浜市中区住吉町 6-68
神奈川県歯科保健総合センター
（神奈川県歯科医師会館）7 階

日本歯科大学 新潟生命歯学部
医の博物館

〒951 - 8580 新潟市中央区浜浦町 1 - 8
http://www.ngt.ndu.ac.jp/